

「パウロたち、フィリピを去る」

2016年07月11日

使徒言行録 16章 35節～40節。朝になると、高官たちは下役たちを差し向けて、「あの者どもを釈放せよ」と言させた。それで、看守はパウロにこの言葉を伝えた。「高官たちが、あなたがたを釈放するようと、言ってよこしました。さあ、牢から出て、安心して行きなさい。」ところが、パウロは下役たちに言った。「高官たちは、ローマ帝国の市民権を持つわたしたちを、裁判にもかけずに公衆の面前で鞭打ってから投獄したのに、今ひそかに釈放しようとするのか。いや、それはいけない。高官たちが自分でここへ来て、わたしたちを連れ出すべきだ。」下役たちは、この言葉を高官たちに報告した。高官たちは、二人がローマ帝国の市民権を持つ者であると聞いて恐れ、出向いて来てわびを言い、二人を牢から連れ出し、町から出て行くように頼んだ。牢を出た二人は、リディアの家に行って兄弟たちに会い、彼らを励ましてから出発した。

パウロとシラスは理不尽に投獄され、思わぬ大地震に遭遇した。しかし、この苦難の中で、看守一家が洗礼を受ける奇跡が起こった。十字架の苦しみに与ることを通して、福音は広がった。彼らは、時が良くても悪くても、常に、宣教の時としたのである。

翌朝、フィリピの高官たちは下役たちを差し向けて「あの者どもを釈放せよ」と言させた。突然、なぜ釈放命令を出したのであろうか。地震によって逃亡できるのにしなかったから、無実だと思ったのであろうか。理由は判らない。看守はすぐにパウロたちに「高官たちが、あなたがたを釈放するようと、言ってよこしました。さあ、牢から出て、安心して行きなさい」と喜んで伝えた。ところが、パウロは下役たちに言った。「高官たちは、ローマ帝国の市民権を持つわたしたちを、裁判にもかけずに公衆の面前で鞭打ってから投獄したのに、今ひそかに釈放しようとするのか。いや、それはいけない。高官たちが自分でここへ来て、わたしたちを連れ出すべきだ。」

ローマ帝国においては、ローマの市民権を持つ者だけが人間として扱われ、誰からも侵されない人権を認められていた。市民権のない者たちはどのように扱われても、構わなかった。パウロは生まれながらにローマの市民権を持っていた。裁判にもかけず、公衆の面前で鞭打って辱め、投獄し、何事もなかったかのように釈放することは認められない。高官たちが来て、謝罪し、釈放しなければならないと抗議した訳である。下役たちは、パウロの抗議を高官たちに報告した。高官たちは、二人がローマの市民権を持つ者であると聞いて恐れ、出向いて来て詫びた。市民権を持つ者を理不尽に扱うことはローマ皇帝を辱めることであったのである。高官たちは震え上がったであろう。彼らは、これ以上問題が起こらないように、二人に町から出て行くように丁寧に懇願した。二人は高官たちを責めることなく、牢を出た。

二人は最初にクリスチャンになったリディアの家に行って兄弟たちに会い、彼らを励ました。フィリピでは、リディア一家と看守一家がクリスチャンになった。両家がフィリピ教会の礎になったのではないかと想像する。パウロとフィリピ教会は深い愛と信頼で結ばれていった。パウロはフィリピ書に、物心ともども、支援してくれることへの感謝の言葉を表しているが、その手紙には、リディア一家と看守一家のことは書いていない。

パウロとシラスはフィリピで、町を揺るがすような働きをし、宣教の大きな収穫を得た。彼らは次の宣教地を目指し、フィリピを去って行った。